

あった。このとき、教会と何の関係もない横文字の本も取り上げられた。特高警察の人々が帰った後、窓越しに見る本は無造作に教室に積み重ねられていたが、これが戦争中の政府の弾圧の始まりだった。閉鎖された学校では何もすることがない。

監視のもとで、もう祈祷会をもつことも出来なくなった。折をみて、二、三人の友達と真剣に祈った。重たい空気の中にこれからどうなってゆくのだろうかと思案に暮れた。教師たちの居ない学院の生徒たちは静かに、次の指示を待ったが、学業の再開の見通しもないまま生徒たちは一人、二人と学院を後に帰郷していった。わたしたち神学部の高学年の生徒たちは、頼まれた訳でもなかったが、学院は神様の学校だから出来るだけ守りたいと思ったので学院に残った。その頃、木更津の警察から私と黒見賢君に呼び出しがあった。

三日間の取り調べを受けたが、(夜は学院に帰ることを許された)取り調べの部屋は鉄の厚い扉があって、人が出入する度に大きな音を立てて閉じられた。日頃、聞いてはいたが実際はそんな生易しいものではないことを知った。このまま家に帰ることはできないのではないかと思った。ひどい仕打ちは無かったが自由を奪われた身にとってはものすごい重圧である。黒見君と私は別々の部屋で取り調べを受けた。その中に「天皇も罪人か」という質問があった。

私たち二人は別々な部屋で取り調べを受けたが、出された問題は同じであった。これに答えた私たちの回答は天使に導かれたのだろう、全く同じであったので特高警察の取り調べ官は驚いたようである。三日間の取り調べの後で帰宅を許されて帰り際に、取り調べをした警察官は「お前たちの教育は大したものだ」と云った。

昭和18年の暮れに私は家に帰った。安息日を守れる仕事を探した。東京衛生病院で働いておられた渡辺芳松先生のお勧めで満州に行くことにした。信仰を共にする黒見賢君が、是非自分も一緒に連れて行って欲しいと欲しかった。私たち二人は満州国立防疫所に勤務することに

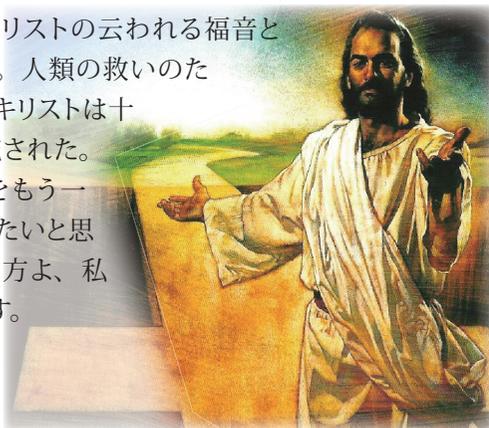
なったが、昭和19年2月に私に招集令状が来た。一人になった黒見賢君は後で結核を患い病死した。私は福岡の連隊に入隊したが、次の日、浜松の航空隊に配属され2日の後に北支、南苑の隼九八八五部隊に転属となった。

軍隊生活ではさまざまな経験をした。苦しいことも多かったが、神との交わり無しには生きてゆけない緊迫した日々であった。初年兵の時、私のニックネームは「耶蘇坊主」。この名前が軍隊でどんな仕打ちを受けたかお解りになると思う。大和魂をじっくりと叩きこまれた。この時、私は骨と皮のようになり身体のあちらこちらに紫色の斑点がない日はなかった。そのうち私のニックネームは「ドクトル」とかわった。そして終戦近くには「神さま」となった。

戦争末期は日本の軍隊は追われる立場になっていった。飛び立って行く飛行機の多くが還ってこなかった。不思議な導きのなかに私は今日、生かされている。これといったこともない信仰生活であったが、それでも福音の完結ということをおぼれたことはない。イエス・キリストは天の父なる神のもとに還られ時、弟子たちに命じられた。

「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのこを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」  
マタイによる福音書 28章 19,20節

イエス・キリストの云われる福音とは何だろうか。人類の救いのためにイエス・キリストは十字架に血を流された。働きの原点をもう一度、考えて見たいと思う。兄弟姉妹方よ、私は祈っています。



世代は時の流れと共に変わって行く。日本伝道の初期に開拓者たちがどのような働きをしたか。今日の指導者たちは今の世代に如何に対応するか、心を傾けている。昔と今は世界が大きく変わっているから教会がどのように対応するかは唯、祈るのみである。

しかし、戦前、戦後を通ってきた信徒たちは何をしてきたのか。ただひたすらに耐え、主の来臨を待ち続けてきた。小さい記録だが残しておきたい。特に戦時中に拘束された牧師、先生方は獄中で苦しまれた。教職者、教会員のなかには殉教者が出ている。今村正一、渡辺保之介先生、京都の横江清兵兄は一信徒でありながら獄死した。

日本で最初の我が教会の宣教師ウイリアム・C・グレンジャー先生の心を動かした大河平輝彦先生、日本初期の指導者たちのエピソードは数多くあるが、これらの先生方は私にとっては歴史上の人物ではなく手の届く実在の人物である。

例えば、大河平輝彦先生は何事にも礼儀正しく控えめで、人を思いやる温かい心の先生であった。また、国谷秀先生はグレンジャー先生の亡くなるときに側にいたが、先生は、国谷先生に言われた。「あなたは祖国の人々を愛するか」。国谷秀先生はそのとき「イエス」と答えた。国谷先生はその時の約束を一生忘れず、生涯を主の働きに献身した。この話はまるで偉人伝の本に出てくるような話であるが、私は国谷先生自身の口から聞いた。

初代の指導者たちは個人的には異なったパーソナリティを持っておられたが主イエス・キリストの召しを信じて一つの目的の為に一致していた。

昔の生き方を、いま、そっくりそのまま実行できるものではないが、外形はともかく今日の福音伝道の鍵があるように思う。

戦中、戦後の時代に生きてきた世代の者は何をしていたか、その中間にあった者は次ぎの時代に遺してゆかなければならないものがあるとすれば「救霊に対するスピリット」ではないかと思う。

「希望への歩み」の著者、岡藤米蔵先生が日本伝道の歩みを集約された著書の序章に「本流をみつめつつ」と書いておられる。まさに現代の現況に必死で対応すると共に、本流の始まりは何だったのか、伝道は何のためにするのかを考えてみたい。

忘れかけた今日の教会がもう一度、注目しなければならぬことは何だろう。主イエス・キリストは福音の働きの完結を人間に託された。それは「魂」の救いというものではなかったのか、キリスト教徒であるならば、それ以外の何ものでもない。

私はメソジスト教会からセブンスデーアドベンチスト教会に転向した者である。そのとき私を強く引きつけたものはセブンスデー・アドベンチスト教会の良心と誠実さである。

バプテスマの誓約にイエス・キリストの十字架の血による贖いと赦しを信ずること。教会は聖書に基づき忠実に神に従っている教会であること。

この二つが区別されていることに驚きを感じた。そして、この教会員となることを希望したなら、何のために伝道するのか、これをはっきりと理解し、主イエス・キリストのために生命をかけて、その生涯を主イエス・キリストに献げる若者が出てくるはずだと思っている。

私は旧三育学院が千葉の檜葉にあった頃、入学した。昭和12年のことである。その時、同じ希望をもった若者が共に上京した。鹿児島から、当文弘先生、小野田質子姉、荒木勝子姉、博多から合流した、梶山孝兄、中村純兄、そして私だった。

先輩や先生方は若者を愛し、よく私たちに云われた。世の終わりの時、迫害が起こるだろう、教会の指導者たちが捕らえられたら誰が救霊の働きを最後まで続けるのだろうか、と。教団も教会も無くなれば当然、生活の保障もなくなるだろう、それでも救霊の働きは続けられなければならない。それはイエス・キリストと私の約束だから。昭和十二年にはセブンスデー・アドベンチスト教会の総会が、今の東京衛生病院のあるところでもたれた。この時の日本全体の教会員は壱千人であった。

この時の指導者方の生活を見て理屈なしに自分も生涯をイエス・キリストのために献げようと心に誓った。これは先に述べたように私の日本三育学院に入学した年で、この年の九月に高木義萌先生の御尊父、高木団治先生が大連から入学された。戦争中、彼は名古屋教会の牧師をしておられたが政府の弾圧を受けたとき、特高に捕らえられ投獄された。

昭和十二年頃の三育学院は院長はP・A・ウエバー先生だった。彼は自給伝道機関から日本に来られた先生だったのでよく働かれた。私たちは彼のことを労働党の親分といった。全校生徒53名。

昭和12年学校の夏休みの終わったころP・H エルドリッジ先生夫妻が来られた。ご夫妻は共に背の高い、ピア

ノの演奏が巧みな先生でエルドリッジ先生は聖書を教え、奥様は音楽を教えられた。

昭和16年、我が国は太平洋戦争に突入した。宣教師は日本に留まることが出来なくなった。F・R ミラード。P・H エルドリッジ先生、東京衛生病院の医師E・H・オルソン先生も離日した。三育学院の院長は日本人の先生に替わったが、ジャパン・ユニオンミッションは外国からの送金が閉ざされたので経済的に窮地に陥った。当然、三育学院もミッションからの資金の援助が無くなった。山本治一先生、大槻金兵衛先生方は学院の経営に苦勞された。

この頃、私たちは周りの状況から、いよいよ最後の時が近づいたと感じた。生徒たちは松林の中や、寄宿舎でも祈祷会を度々ひらいた。



この頃の三育学院の生徒たちは未熟ながら生き生きとしていた。当然この頃の男であれば遅かれ早かれ軍隊に招集されるだろう、その時、どうして信仰を守るかということが一番心配なことであった。祖国を愛する気持ちは強いものがあるが、銃を手にしなければならなくなったとき人が人を殺すということに厳しい良心の戦いを持ったろう。どうしてこれを拒むことが出来るだろうか。

少し後になるが、ローマリンダの医学部を卒業した辰口信夫医師はアッツ島で戦死した。若者は何時、戦場に呼び出されるか解らないような雰囲気の中かに信仰を守るということが身近な問題となってきた。私は今でも、あの青年達の紅潮した素朴なまなざしを忘れることはできない。昭和18年9月20日、私たちは夏休みを終えて学院に帰ってきて間もなくの事であった、朝食を終えて寄宿舎から校舎に行こうとしていた。すると十数名の男の人たちが学校の坂を登ってきた。後で知ったことだが、この時はすでに教師たちは特高警察に検挙されていた。生徒達は寄宿舎で待機するようにと云われたので寄宿舎に軟禁される形となった。

間もなく、教会の書籍はみんな提出するようにと指示が